

第35回 泌尿器科中部連合総会シンポジウムⅠ

前立腺肥大症の治療の諸問題

司会：近畿大学医学部泌尿器科学教室（主任：栗田 孝教授）

栗 田 孝

司会のことば

前立腺肥大症は泌尿器科特有の疾患として古くからよく知られたものであるが普遍性、日常性からいえばその最右翼に存在するといえる。しかし何故か最近では研究報告や論文はごく限られた範囲にしか見当たらず、きわだった脚光をあびている様子はない。教育研究機関や診療の実践側であるを問わず、それぞれの立場から泌尿器科医としてはこの疾患には十分に高い見識を語りうる特性があるとひとしく考えられそうだ。

高齢化の進む日本の社会では老人医療対策を論じる際に、誰も前立腺肥大症に言及しているが、家庭医学的な安易さに毒されているあまり好ましくない風潮である。高齢化に伴う排尿障害を単に前立腺肥大症に相関させるのは短絡化の極みであり、腺腫の発生の機構の解明に通じる問題として取り組まねばならず、内分泌学の著しい発展によっても全てが明白になったとは思われない。排尿困難が腺腫による器質性障害と限定して考えるには下部尿路の神経薬理学的な最近の知

見は無視しえない。

泌尿器科医の立場は歴史的にも通過障害の外科的排除という明快なものであったと思われるが一般の臨床における前立腺肥大症はもっと曖昧模糊と感覚的に治療方針が立てられている傾向が強い。ここにいたって前立腺肥大症を学術の場にとりあげたことは古くからある概念の新たな変革を喚起するかもしれない。

今回、会長より依頼された本シンポジウムの主旨もこのあたりと推察し、いろいろな立場の専門家から第一線の生きた治療の実態を中心に発表して頂く様お願いした。

前立腺肥大症の治療に関して改めてその本質を考え直すよい機会が与えられたものと感謝し、診断基準は如何にあるべきか、治療方針と治療効果の判定のありかた、合併症、副作用の対策など、極めて常識的に見過しがちな点をもう一度みんなで検討し、今日から明日への治療に役立つことにまとまったものと感謝したい。

（1986年3月10日受付）